



# 試練の時

11月17日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 11月17日のおはなし「試練の時」

コルドアの丘を登り、振り向くと砂漠に夕陽が沈むところだった。1日中あんなにじりじりと何もかもを焼き尽くそうとしていた太陽が力を失い濃赤色のゆがんだレンガのような形になって砂漠の果てに埋もれていく。あたりを血の海のように染めながら。

ぼくは丘の上に向き直ると、頂きにたつ日干し煉瓦づくりのこじんまりとした建物に近づき、戸口の脇をノックした。戸は開いていたからだ。しばらくして建物の中の薄暗がりから小柄な老人が姿を現した。片手には杖、片手には兎のマークが就いた雑誌。ゲルロイ爺さんだ。ぼくは手みやげのイモリの黒焼きを5本手渡した。爺さんは嬉しそうに受け取るとすべて腰ひもにさしこんだ。

「どうなすったエーブの息子よ」

「ゲルロイ爺さん、教を請います。大人とは何ですか」

「大人か。つかい棒だ」

「は」

「つかい棒だよ、エーブの息子よ」

ぼくはしばらくその言葉を頭の中でぐるぐるさせながら考えていた。大人とはつかい棒。それはどういう比喩だろう。何を支えるつかい棒だろう。あるいは何を妨げる棒なのか。それは通せんぼうか。まさか固くなったペニスのことを言っているんじゃない。

「それはどういう意味ですか？」

「わからんかね」ゲルロイ爺さんはこういう時に決して相手を馬鹿にしたりしない。杖で足元に絵を描きながら話し始めた。「ここに子どもがおる。そしてこちらには年寄り。どうだ、ん？」

どうだと言われても正直困る。爺さんが描いたのはくしゃくしゃとした線でしかなかった。感想の言いようがない。でも機嫌を損ねたくなかったのでぼくは「子どもと老人、離れてますねお互いに」と微笑んでうなずいた。すると爺さんは嬉しそうにうなずき、子どもと老人の間に絵を描き足した。ひときわ背の高い人の絵だ。

「そしてこの間が大人だ。わかるか。子どもと老人の間、それが大人だ」

「はあ、まあ」

「子どもと老人は自由だ。好きなときに好きなようにしておればいい。何か問題があれば世話を焼いている者がどうにかすればいい」

「なるほど」全然要領を得なかったが相づちを打った。「でも大人は違う」

「その通り！」ゲルロイ爺さんは腕を振り回して興奮気味に言った。「見ろ。これが地面だ。そしてこれは何だと思う？」

さきほどの大人の頭の高さに横棒を引っぱったので、ためらいなくぼくは「空」と答えた。

「ばかもん！ 空はここ。ここ全体だ。もっと広い。これはな、社会だ」

「社会？」

「見ろ」爺さんは杖の先で指す。「子どもと老人は社会を背負っておるかな」

「いえ」

「大人は？」

「頭がつかえています」

「そうだ。大人は背が高い。だから頭が社会に届く。届くだけじゃない。頭の上に支えている。大人が社会を支えるのだ。子どもは関係ない。老人も関係ない。大人だけが支えている。上から落ちてこないようにこうしてつかい棒になっている」

「ああ。だからつかい棒」いったん納得しかけたが、急に疑問が湧いてきた。「では大人の証は背の高さ、ですか」

「背の高さだ」爺さんはじろじろとぼくを見ながら言った。「大丈夫。おまえだってまだこれからもっと伸びるから」

余計なお世話だ。確かにぼくは背が低いが、これまでそのことを特段不満に思ったことはない。でもさすがに背の高さが大人の証だなんて言われると釈然としない。そんな気持ちを知ってか知らないでか、爺さんは勢いづいて話を続ける。

「だから、チョンシーの息子なんかは早々と大人だ」

チョンシーの息子というのは同い年の友達で、ひときわノッポだ。でもそんなのありかよ。そう思ったから、ぼくはつい声を荒げた。

「本当ですか?!」

「こわいよ。エーブの息子、こわいよ」ゲルロイ爺さんは泣き始めた。「おいおい。おーいおいおい」

「泣くことないだろ」

「おーいおいおい」

なるほど老人は好き勝手にできるわけだ。考えたらゲルロイ爺さんは本当にのびのびと好き勝手やって生きている。じゃあぼくは？ 子どもだし背も低いけど、こんな風に自由気まま、好き勝手にはできない。ぼくがため息をつくと、突然嘘泣きをやめて爺さんは言った。

「大人は大変だ。社会を支えているが、社会に押さえつけられてもいる。子どもと老人の間の試練の時だ。いずれ老人になれるとわかっているから何とかやっていけるが、そうでなければ到底つとまらん。だからおまえも今のうちにせいぜい羽目を外して楽しんでおけ。大人になるまでのうちにな。そして大人になったら、その続きは年を取ってからの楽しみにしておけ」

ゲルロイ爺さんは案外まじめな顔をしてそう言っていたので、ぼくもうなずいてお礼を言った。まだ何だかよくわからなかったけれど、まあそういうことなら頭が社会につかえるまでは好きにしよう。つかえたら、腹をくくるとしよう。

(「大人」 ordered by ピーターパン阿部-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 試練の時

<http://p.booklog.jp/book/39038>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39038>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39038>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.